

情操教育としての異文化理解教育

— その可能性と課題 —

Intercultural Understanding Education as Cultivation of Aesthetic Sensitivity : Its Prospects and Issues

柳原 里枝子

YANAGIHARA Rieko

キーワード：「異文化を知る」・情操教育・異文化理解教育・国際理解教育・多文化共生

1. 概要

1.1 背景と動向

1990年代頃から加速していたグローバル化、つまりヒト、モノ、カネ、情報の国際的移動が2020年のコロナウィルスの世界的大流行によって大きな影響を受けている。特に、ヒトの移動においては世界的に大きく制限され、一方で、情報の伝達方法や伝播はさらに急速な広がりを見せている。大学教育においても留学プログラムなどで実際に海外へ行って異文化体験することのみならず、海外の珍しい物品などを実際に見て、触れて、学ぶといった対面形式の授業機会さえも持つことが難しい状況があった。オンライン授業を余儀なくされた状況で、大学における異文化理解教育をどのようなものにすればと良いのか、という観点から異文化理解教育に関連する授業の再検討を図る必要性があった。

また、近年の国際理解教育において頻繁に掲げられる「多様性」、「多文化共生」、「Sustainable Development Goals (SDGs: 持続可能な開発目標)」の実現に向けて、世界各地で起こっている分断や紛争、あるいは世界規模で取り組むべく地球環境問題など看過できない事態を解決するために、国・地域や人種を越えた平和実現や問題解決の取り組みに向けた人材育成が喫緊の課題となっている。

1.2. 問題と目的

本稿では、大学における異文化理解教育のあり方を、授業実践という観点から考察する。授業実践という観点においては、文部科学省が学校教育における国際理解を推進するために「実践的な態度・能力を育成していくため、国際教育の実践力の向上と「学びの広がり・深まり」をもたらす授業づくり」を基本的視点として捉え、各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間等を含めた学校での教育活動全体の中で取り組む重要性を強調している。その一方で、「国際理解教育を取り巻く現状と課題」として、文部科学省はいくつかの観点から問題点も示している。授業実践からの観点においては、現状と課題として2点ほど指摘されている；(1)「一部の教員任せになっており学校全体の取組になっていない傾向」と(2)「英語活動の実施すなわち国際理解という誤解、単なる体験や交流活動に終始など、国際教育の内容的希薄化、矮小化への懸念」である。このような現状と課題の背景に、国際理解教育で扱うべく要素となる「国際的」な事物や「文化」という概念に含まれる要素があまりにも抽象的で多岐にわたることがあることは容易に推測できる。また、それらに対して膨大な観点が含まれるため、目的や目標の設定が難しいことも考えられる。さらに、その

アプローチや評価のし方に一定の基準がないことが大きな理由としてあげられる。

国際理解教育や異文化理解教育として、今後においても更なる教育的プログラムが必要だと考えられるが、目的や目標の曖昧性への指摘や混乱も見受けられる（佐藤 2007, 文科省, 2005 a）。そのため、どのようなアプローチが効果的であるか模索が続いている現状がある。また、多くの文献では国際理解教育と異文化理解教育が同義として扱われているが、本稿では国際理解教育と異文化理解教育を区別し、特に異文化理解教育に焦点を当てることとする。したがって、本稿では、大学における異文化理解教育のアプローチについて検討することを目的とし、後述する「情操教育」としての異文化理解教育の実践を通して、その可能性と課題について考察する。

1.3. 国際理解教育と異文化理解教育の位置づけ

国際理解と異文化理解について区別をするため、それぞれの位置づけを整理しておく。文部科学省国立教育政策研究所と JICA は、2011 年に共同で「グローバル化時代の国際教育のあり方国際比較調査」を行い、JICA の国際比較調査チームがまとめた『国際理解』を表す用語の定義とその導入の背景は次のように示されている（表 1）。

表 1 「国際理解教育」の定義

| 用語 | 定義 |
|--------|---|
| 国際理解教育 | <p>● 文部科学省は国際理解教育の定義を特に定めていないが、「国際社会においては、子どもたちが日本人としての自覚を持ち、主体的に生きていく上で必要な資質や能力を育成することが大切です。また、我が国の歴史や文化、伝統などに対する理解を深め、これらを受容する心を育成するとともに、広い視野を持って異文化を理解し、異なる習慣や文化を持った人々と共に生きていくための資質や能力の育成も重要となっています。こうした観点から、（中略）国際理解教育が行われています。」としている*。</p> <p>● 特定非営利法人 NIED 国際理解教育センターの定義：「自分との関わりにおいて地球の課題（人権・環境・開発・異文化理解・平和・未来など）を包括的に理解し、知識だけではなく、共通の未来・公正な地球社会作りに『参加する技術』『参加する態度』を養おうという総合的な教育活動」</p> |

* 『平成 17 年度版 文部科学白書』

文部科学省国立教育政策研究所・JICA（2011）「グローバル化時代の国際教育のあり方国際比較調査」（一部抜粋引用）

表 1 に示されているように、学校教育現場における文部科学省の国際理解教育の考えとして「異文化を理解する」こと、「異なる習慣や文化を持った人々と共生する能力の育成」が核となりうることが想定される。また、NIED 国際理解教育センターの定義によると、「自分とのかかわりにおいて地球の課題を理解」と、「共通の未来・公正な地球社会作りに参加する技術や態度を養うための総合的な教育活動」と解釈できる。しかしながら、依然として抽象的な概念や曖昧性を残しているように思われる。そのため、どのようなアプローチが効果的であるか模索が続いている現状がある。

一方、異文化理解教育の定義においても数多くの定義が存在するが、その前提として文化についての定義もなされる必要がある。しかしながら、文化的な事象の説明が困難なものや、行動・生活様式などの要素や文明などとの関連性を含むがゆえにその定義づけも完全には確立されていない。

佐野ら(1999)は、文化摩擦の観点から「実質行動」と異文化理解の関係を示している。「実質行動」とは、「コミュニケーション行動」（言語的・非言語的コミュニケーションなど）以外の人間のあら

ゆる行動を表し、それが文化摩擦を生じさせる一因であると説明している。図1で見られるように、「言語使用の適切さ」や「非言語的手段」などの「言語外コミュニケーション行動」の知識は、実際には「礼儀」と密接な関係にあり、両者が不可分であることを指摘した上で、「実質行動」は異文化理解の知識、「コミュニケーション行動」は異文化間コミュニケーションとして分けられている。この説明によると、国際理解教育の要素と比較して、異文化理解はより身近な一般常識、礼儀、価値観などによる社会・文化行動を指すことが示唆される。

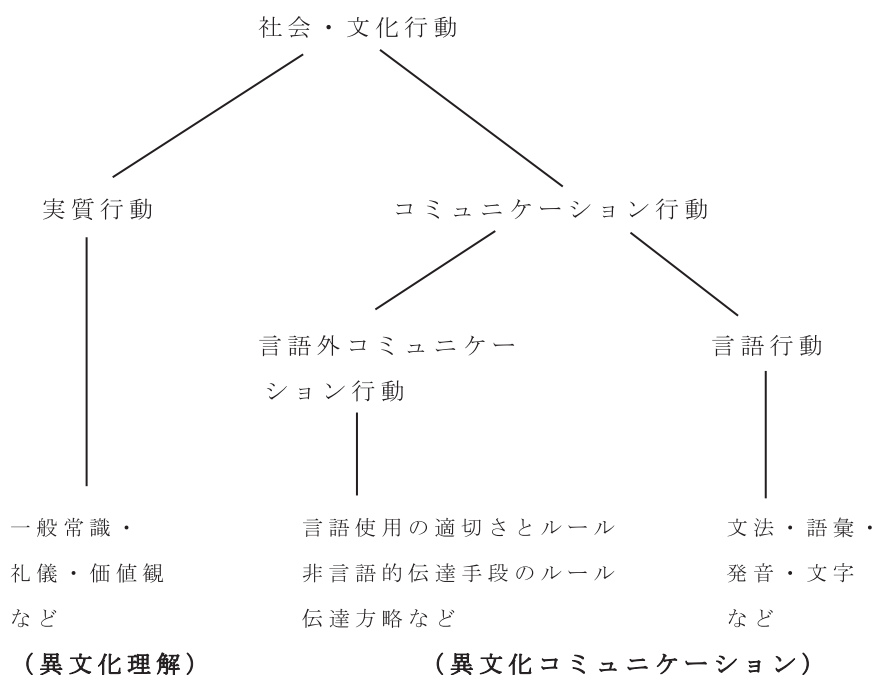


図1：社会・文化行動から見た異文化理解と異文化コミュニケーションの位置づけ (佐野ほか, 1997, p.62)

佐野ら (1999) は、外国語教育における異文化理解教育について言及し、英語で英語圏の文化を教えるだけではなく、日本語も利用しながら学習者が現に持っている自国の文化についての *competence*, つまり、「異なる発想をする他人を分析し受け入れる能力を核にして、それを異文化までに拡大していくことが大切である」と述べている。

多くの国際理解教育あるいは異文化理解教育では、国際社会で活躍できる異文化理解能力をもった人材を育成すべく、国際的なものや外国語によるコミュニケーションや留学などの異文化体験に焦点が当てられることがほとんどである。しかしながら、竹内 (2012) は「異文化理解能力」の概念の曖昧性について、「異文化コンテキストにおいて適切に振る舞う能力」というような異文化理解能力を表す定義が、正確には異文化理解の為の「能力」ではなく、異文化コミュニケーションを通してそのような能力を発揮することによって生まれる「結果」の描写である、と指摘している。したがって、国際理解教育においては、国際的な話題・知識や異文化体験などを取り入れるだけではなく、実際の異文化体験の前段階において、新しい文化に対する新たな視点や価値観を養うことができるように仕組むことが重要であると考えられる。

また、瀬田 (2007) は、異文化理解教育を国際理解教育の中の重要な一分野と位置づけた上で、異文化理解教育の実践に必要な文化要素を目に見える外面的文化要素と目に見えない内面的文化要素の2つに分類し、各要素に含まれる文化項目について提案を試みている。これら2つの文化的要

素における包括的な文化概念は「文化とは、意識的にせよ無意識的にせよ社会の中で学習されるもの」(瀬田, 2007, p.130)とされている。外面的文化要素として、瀬田は学習者の発達段階を考慮し、校種別に異文化理解教育で扱うべき要素の分類を提案した。内的文化要素としては、価値観・価値指向に限定し、異文化理解教育で扱うべき4つの要素を提案した(表2)。

表2：瀬田(2007)による異文化理解教育で扱うべき文化要素

| | | |
|---------|------|--|
| 外面的文化要素 | 小学校 | 食べ物, 衣服, 住居, 気候, 学校の様子, 遊び |
| | 中学校 | 食べ物, 住居, 学校生活, 遊び, 言語, 教育制度, 社会構成 |
| | 高等学校 | 食べ物, ファッション, 言語, 宗教, 学校の様子, 教育制度, 政治・経済, 歴史, 芸術・文学作品 |
| 内的文化要素 | a. | 個人主義 (individualism) / 相互依存 (interdependence) |
| | b. | 可動性 (mobility) |
| | c. | 社会的相互性 (Social Reciprocity) |
| | d. | 交友関係 (friendship) |

このように、異文化理解教育に必要とされるものは、直接的にそれぞれの文化や言語活動と結びつくものというより、むしろ価値観に繋がっているものという見方ができる。多民族・多文化共生のための国際的視点を養うためには、国際理解教育や異文化理解教育においては、対象となる国の人々や文化に対する気持ちや心の在り方、価値観、すなわち「情操」が重要となると考えられる。

2. 情操教育について

2.1. 情操の定義

「情操」の定義は必ずしも一定しておらず、定義するのが非常に難しいものだと見受けられる。その上で、林(1978)は、情操は一般的に「文化的・社会的価値を持つ対象にたいして抱く複雑でしかも比較的静的で持続的な高次の感情である。」と説明し、さらに分かりやすくいえば「価値感情」とでもいえる、と説明している(林, 1978, p.47)。さらに、情操とは、「真なるもの、善なるもの、美しいものなどの価値にたいする理想にむけられる時、体験される心的状態(感動する気持ち)が情操(sentiment)といわれる。これは、感情の一種であるが、基本的欲求が伴っていないところの感情である。」と広義的解釈が示されている(林, 1978, p.37)。すなわち、真善美に対する価値感情であると解釈することができる。「情操」はさらに分類され、「道徳的情操」、「美(芸術)的情操」、「宗教的情操」、「知(論理)的情操」などと呼ばれることがある。「道徳的情操教育」とは、他者を思いやり、物事の善悪を判断する力を養うための情操教育を指し、協調性や社会性を身につけることに役立つと考えられている。「美(芸術)的情操教育」は、「美しい」と感じる心や素直に感動する心を育て、豊かな感情による想像力や創造性に繋がると考えられている。「宗教的情操教育」は、自己だけでなく、自然界における動植物の生命の尊さを知り、他者に対する尊重・尊敬の念を育む情操教育を意味する。特定の宗教の知識や信仰心を育む情操教育を指すわけではない。「知(論理)的情操教育」は、知的好奇心を促し、積極的に学ぶ姿勢を育てる情操教育を指す。これら4つの領域は、異文化理解教育においても共通する観点である。よって、本稿では、これらの4つの情操教育の概念を異文化理解の情操教育的アプローチにおける観点として用いることとする。

一方で、「情操」と密接にかかわっている概念として「情動」がある。佐藤(1962)によると、情動(情

緒)とは、「怒り・恐れ・驚き・喜び・悲しみ・憎しみ・愛情・嫉妬などのように、生命の危機や衝動的欲求の妨害や欲求の満足に伴って体験される比較的強い分化した心の状態である」と定義されている。佐藤・古島(1966)は、この情動と情操について次のような概念の捉え方を述べている。

情操という用語はセンチメント (*sentiment*) の訳語といえる。情動はかつて情緒といったが、これはエモーション (*emotion*) の訳語である。エモーションはまさにモーション (*motion*) であり、気が動くことであり、それで情動という訳も出てきたわけであろう。喜怒哀楽その他どのような感情でもいいが、あり刺激に対しての激しい動きのある感情を情動と呼ぶ、その時その場の刺激に応じての反応が情動だとおさえてよい。(p.5)

さらに、佐藤・古島は、情操を2つの考え方に分け、「感情の過程」と「感情の構造」としての見方を示した。

(前略) 情操についてはいろいろな考え方があるようだが、大きくいって二つの考え方を区別できる。一つは、感情の過程とみるのと、もう一つは感情の構造とみるのとである。(中略) 両方を含めて情操というのは、その時その場の刺激に対する反応というだけではなくて、そういう反応が場合によっては純化される面もあるだろうし、場合によっては習慣化される面もあって、その結果、情動のように衝動的な、断片的な、偶発的なものではなくて、あるひとりの人格の基底として安定したもの、これを情操というふうに押さえていいのではないかと思う。(p.5-6)

佐藤・古島によると、情動は、刺激に対する喜怒哀楽のような感情を伴う一過的の反応を指す。情動は動的・爆発的で、感情の主体が刺激に支配されている概念とされる。一方、情操の概念には2つの捉え方があり、1つ目の「感情の過程」としての情操の概念は、刺激に対して冷静に判断や批判を下すことを表す。この概念は、情動と比較して、「純化され昇華された高級な感情」を示した概念であるとされる。2つ目の「感情の構造」としての情操は、ある特定の刺激対象について同じような反応を習慣的に繰り返していると、同様の事態に対しては同じような反応が起こるようになると考えられており、そのような固定化されていく傾向を意味する。異文化という未知のある種の刺激に出会う際、上記のような「ひとりの人格の基底として安定したもの」によって、その刺激との向き合い方が変わってくるものと考えられる。

2.2. 情操教育と関連教育分野

日本における情操教育は、教育現場で幅広く導入されている。情操という言葉自体は戦前(古くは明治時代)から使われていたようであるが、情操教育という言葉は、とりわけ保育・幼児教育や学校教育における音楽・体育・図工(美術)・道徳などの分野で重要視されている。保育における「情操教育」の定義は、広義として「愛情や信頼感をもって園生活を楽しむ中で、美しいもの、尊いもの、崇高なものを見たり聞いたりし、素直に感動し、それを身近な人に表現しようとする気持ちを育てることをいう。」と示されている(保育用語辞典, p.79)。ここでは「園生活」という極めて限定的な場面における定義ではあるが、子どもたちにとって園生活は一種の社会生活として見なすことができる。また、子どもたちが心や人間力としての基盤となる情操を育むのに適した時期が幼児期から10歳前後とされ、一般的にはその時期に情操教育を行うことが奨励されている。

一般的な「情操教育」の定義としては「(ヘルバルト学派が用い始めた語) 創造的・批判的な心

情，積極的・自主的な態度，豊かな感受性と自己表現の能力を育てることを目的とする教育。知性・道徳性・美的感覚・共感性などの調和的な発展をねらいとする。」とされている（広辞苑，2014）。このような目的を持った情操教育は，幼児期から10歳前後の児童のみならず，思春期やそれ以降における人格形成や人間の成長過程においても重要なものと考えられ，情操教育は幼児教育から大学までの教育における全ての教育的基盤として共通した目的と考えられる。仮に情操を育むことが可能な時期が幼児期から初等教育の期間に限定されたとすると，それ以降の学校教育の意義について情操教育を除外して説明することが難しくなってしまうのではないかと考える。高等教育において新しい情報や知識を得ると，物事に対する視点や考え方が変わる可能性があり，情操においてもそのような柔軟性が残っていると考えられる。したがって，先述したような，文部科学省が提案している国際理解教育の各教科，道徳，特別活動，総合的な学習の時間等を含めた学校での教育活動全体の中で取り組む難しさといった課題に関しては，情操教育的アプローチによって解決できる可能性を見出せるのではないかと考え，その可能性を探ることとする。さらに，高校までの学校教育で行われた国際理解教育を大学ではどのように情操教育と関連づけて発展的に扱うべきか検討する。

3. 異文化理解教育の情操教育的アプローチ

3.1. 授業実践

2021年度4月から7月に実施された共通教育科目としての「異文化を知る」（履修登録120名）において，情操教育の観点を利用した授業を行った。全15回のうち，12回は広島県内のコロナウィルスの感染状況を鑑みてオンライン授業（同時双方向型・オンデマンド型）で実施した。使用テキストは、『異文化理解とオーストラリアの多文化主義』（田中，2019）を使用した。本テキストの特徴としては，オーストラリアという一国の文化様式のみならず，国民性や価値観を通して多民族・多文化共生のあり方について考えることができる書籍である。

3.2. 授業展開

前述の国際理解教育や異文化理解教育における問題点を踏まえて，内容やテーマにまつわる情操教育の4つの概念を観点として導入した。授業展開としては，最初に課題に対するフィードバックを行い，匿名で受講生の回答からいくつかを紹介した。

(1) 課題や確認クイズのフィードバック（10～20分）

提出された受講生の回答を匿名で紹介

(2) 本時の内容・導入，展開，まとめ（60～70分）

テキストの内容やテーマについて解説，その他の文化情報や資料などを紹介

(3) 本時の課題の説明・確認クイズの提示（5分）

(4) 課題・確認クイズへの回答（15～20分）

Google ClassroomやGoogle Formsを通じて主に短文形式で回答し，翌週までに提出

授業において工夫した点は，授業内容を踏まえながらも，内容そのものや，知識に関する課題や確認クイズだけではなく，他の文化や自分の文化について，受講生一人ひとりが自身の視点や価値観によって気持ちや考えを述べられるような問いを設定した。また，模範解答となるような意見ではなく，なるべく異なる意見を提示し，他の受講生からの回答を共有することによって自分とは異なる視点への気づきを促すよう仕組んだ。表3は，情操教育の4つの観点に関連づけた質問例を示したものである。

表3：質問例と情操教育的観点

| 質問例 | 問い | 異文化理解教育的気づき | 情操教育的観点 | 質問例 | 問い | 異文化理解教育的気づき | 情操教育的観点 |
|-----|--|----------------------------------|-------------------------|-----|--|-------------------------------------|-------------------------|
| 1 | 日本を訪れる外国人に対する「外国人お断り」と言う旅館の対応は、差別や偏見、誤解を与えかねません。旅館の対応として欠けている配慮は何だと思いますか？（テキストp.5参照） | ・異文化コミュニケーション ・差別・偏見 ・誤解 | ・道徳的情操教育 ・宗教的情操教育 | 6 | 今回の授業では日本の学校で子どもたちが自ら掃除をすることについて触れましたが、海外では「見習うべき教育」とされる意見が多い一方で、「児童労働」だとみなされる見方もあります。これについてあなたが海外の人に日本の学校での清掃活動を説明するとき、どんなことに気をつけてどんな風に説明しますか？ | ・異文化コミュニケーション ・文化比較 ・アイデンティティ | ・道徳的情操教育 ・宗教的情操教育 |
| 2 | ブログ、ライン、ツイッター、フェイスブック、インスタグラムなど、SNSにおける異文化理解として、あなたが気をつけるべきだと思う点を1つ挙げてください。 | ・ヘイトスピーチ ・異文化コミュニケーション ・誤解 | ・道徳的情操教育 ・美（芸術）的情操教育 | 7 | 日本における動植物について、私たちにあまりにも当たり前すぎて気づいていない点がたくさんあります。例えば、自国に顔の田んぼがない欧米の多くの人たちは、田園風景を見てとても美しいと感じるようです。日本の動植物について調べてみましょう。日本にしかない動物または植物のうち1つを挙げ、それらの特徴や生息地などの情報を加えて、日本の動植物を通して見えてくる日本人の感覚や文化について考察してみましょう。 | ・自文化に対する意識 ・文化比較 | ・知（論理）的情操教育 ・宗教的情操教育 |
| 3 | テキスト(p.58-63)には日本とオーストラリアの国民性の違いがいくつか挙げられています。p.58の表について、「日本とオーストラリアではその国民性・価値観に大きな差異があり、ほとんど正反対だといえる。」と述べられています。一方で、国民性や価値観で似ている点もあります。日本とオーストラリアの「国民性・価値観」における共通点を調べて、1つ答えてください。 | ・文化比較 ・自文化に対する意識 | ・知（論理）的情操教育 | 8 | 日本の先住民族（①か②のいずれか）とそれぞれの民族が抱える問題について調べてみましょう。 ①アイヌ民族 ②琉球民族 *授業ではオーストラリアの先住民について学習 | ・自文化に対する意識 ・アイデンティティ | ・宗教的情操教育 ・知（論理）的情操教育 |
| 4 | テキストp.76-81に「トル・ゴビー症候群」に関するオーストラリア人の気質がよくわかる例が挙げられています。さらに、ここでは「出る杭は打たれる」という表現を使って日本人とも共通する気質が述べられていますが、あなたが日本（あるいは出身国）におけるトル・ゴビー症候群のあらわれだと思う身近な例を1つ（ただし、テキストや授業資料には書かれていない例）をあげてください。 | ・文化比較 ・自文化に対する意識 | ・道徳的情操教育 ・知（論理）的情操教育 | 9 | 日本においては今後も少子高齢化が進むと予測され、人口減少に伴い労働者不足が懸念されています。その問題の解決策の一つとして、外国人労働者の受け入れが増加し、日本もオーストラリアのような多民族共生国家として認識する必要性が生じてくると考えられます。日本が多民族共生国家となるには、どんな前提（条件）が必要だと思いますか？あなたが「現在の日本のこの問題を解決しないと、多民族共生国家の実現は不可能だ」と思う日本の課題を2つあげてください。 | ・文化比較 ・自文化に対する意識 ・多民族多文化共生 | ・道徳的情操教育 |
| 5 | 前回の授業で「世界幸福度調査 2020年版（156か国対象）」によると、オーストラリアが12位（日本は62位）と紹介しました。なぜオーストラリア国民の幸福度は日本よりも高いと思いますか？幸福度調査の結果から示唆されるオーストラリアの国民生活（本時の内容）についてあなたが気づいたことを1つあげてみましょう。 | ・文化比較 ・他者の視点をもつ | ・道徳的情操教育 | 10 | 今回の授業で、「多様化と多様性(diversity: ダイバーシティ)は異なる。」という話題に触れましたが、(国民性・文化・価値観における)「多様化」と「多様性」の違いは何でしょうか？ | ・多様性 ・多民族多文化共生 | ・道徳的情操教育 ・知（論理）的情操教育 |

例えば、質問1については、テキストで紹介されている外国からの訪問者と宿泊先の対応に関する誤解の例を取り上げて、上記のような問いを投げかけた。テキストで扱われている話題の背景としては、オーストラリアから日本を訪問する人たちの中には、地方の伝統的な旅館に宿泊することを望むこともあるが、旅館に問い合わせると外国人はお断りするという返事が少なくないそうである。外国人からすると、それを差別や偏見だと受け取られるが、旅館側の話をよく聞いてみると、さまざまな異なる生活文化や食文化に旅館が対応できないのが主な理由であり、偏見ではないということである。このような事例を扱った上で、質問例に対する受講生の主な反応は表4の通りである。

3.3. 受講生の反応と情操教育的観点

受講生の回答からは、質問項目と適合する情操の種類として厳密に区別される反応というよりは、むしろ、それぞれの情操の要素が複雑に絡み合っているような興味深い回答がいくつかあった。また、異文化理解教育以外の科目や分野と関連づけた回答もいくつか見られた。例えば、質問例1に対する回答において、観光学で学んだことと関連づけた回答や、質問例6においては禅的な思想、質問例5や質問例9においては、政治的視点や社会的視点を含んだ反応が見受けられた。

表4に示されている受講生の反応例は、全体のごく一部ではあるが、他の受講生からのにおいても概ね質問項目と関連している情操の種類に呼応するような回答であった。例えば、質問1に対する回答では、外国から日本への訪問者に対して配慮する心（道徳的情操）や相手を尊重・尊敬する心（宗教的情操）に関する意見が述べられているものが多かった。

表4：受講生からの反応例

| 質問例 | 受講生の反応 | 質問例 | 受講生の反応 |
|--|---|--|---|
| 1 | お断りしないといけない理由があるなら伝えるために伝わるように書かなければならないと思います。こちら側は様々なことを考えているかもしれないけど、外国の方からするとその理由がないと分からないため差別だと思われても仕方ないと思います。海外旅行者も日本の文化が分からないのでその場でどうすればいいのか英語で理解してもらえようにするべきだと思います。 | 3 | 民主主義が定着した近代国家 自然に対する畏敬の念を持っていること |
| | (旅館側は)決して差別や偏見などではなく、さまざまな異なった文化に対応できず、問題が起こりやすい為にお断りしていることをきちんと伝えるようにするべきだと考えました。例えばホームページや看板に外国語表記での説明書きを掲載するだけでも、それを読んだお客様は納得することが出来ると思います。 | 4 | 学校のいじめなどで、止めた人が次のターゲットになる(見て見ぬふりをすると) |
| | こちらが外国人に対応できないからこそ、始めから断っておくというのは日本人らしいある種の優しさであると云えます。しかし、外国人観光客は日本に興味を持って来て来てくれているので、快く対応を行うことが観光地に住む私たちにとっての義務であると観光学で学びました。また、私たちにとても観光客と話したりすることは不慣れである場合もありますが、それもまた未知から得られる知見が大きい好機であると考えます。 | | 空気を読むことが大切にされていること(同調圧力) 流行に乗るという風潮 就職活動において、服装自由の参加要項でも実際に私服で行ったりすると浮いてしまうところ |
| 異なった文化に対応できないことが原因と書いてあるが、私はそれが当たり前のことだと思いました。なので、1番できる配慮としては、外国人が旅館を予約する時にどこの国から来たかを把握しておく事前に準備できると思いました。そうすることで、例えば、この国の人は生ものを食べないなどということが分かると、生ものより火を通したものを提供でき、配慮することはできると思いました。 | 5 | 休暇が取りやすい、店の閉店時間が早いという点から、オーストラリアではやはり自由度が高く、仕事よりもプライベートの時間を重視していることに気づいた。 | |
| 2 | | 国にはそれぞれの文化があることを理解して、自分の国と文化とは違うという意識を持って、SNSを使用すべきである。 | 年金制度が日本よりも整っているという部分に目を付けました。老齢年金は税金で賄われているため保険料の負担もなく、これは現役時代の納税額や所得は関係がなく、一定額支給されるらしい。その自分たちの老後考えた際に安心できるという点が幸福に繋がっているのではないのでしょうか。また、ショッピングモールなどの閉店時間が短い分店員への負担が少ないため働きやすい=自分のために時間を使える、家族と過ごせるので国民の多くが幸福だと答えているのではないかと思います。 |
| | | SNSはどこでも誰とでも繋がれるという利点があるが、それ故に異国の人と交流する機会もあるので自分の常識だけでなく異国のルールも意識して使うこと。 | 税金などが高い代わりに必要な政府からの保障が受けられ老後の生活まで保証されているため |
| 最近SNSで海外の人の食べ方や、文化などを大げさに真似したり、ネタとしてふざけている動画が見られる。そのままを伝えればいいと思うが、事実ではないことを動画にあげているのが見られるので、異文化理解をするためにはなるべく本など確かな情報を集めるべきだと考える。 | 6 | 日本人は「来た時よりも美しく」という気持ちが強い ため労働しに掃除するのではなく自らが掃除しようという姿勢で行っている。だから、それを学ぶために学校で行われている。 | |
| もし、SNSで外国の方と会話をする際は、自分の伝えたいことをしっかり文に出来ているかを確認しなければならぬ。なぜなら、SNSでは顔が見れずに会話をする事が出来る。それは、自分の言いたいことを顔やジェスチャーなどでは表現出来ない。また、自分の文をしっかり打てたととしても、相手にとっては失礼な文になるかもしれない。 | | 昔から「掃除は授業の一環」として根付いている。学校への感謝の気持ちや、協調性の育み、公共マナーを身につける効果があると説明する。 | |
| 他国の人が日本語がわからないからといって日本語で他国のことを傷つけることは投稿しない。 | 9 | 掃除をすることは苦ではないことを第1優先にして伝える。あくまで教育の一環であり、それをする事で将来どのように役立ってくるかなどについて学べることなどのメリットを中心に伝える。 | |
| 2 | | 次に使う人や自分のために掃除する日本人らしいおもいやりの気持ちで掃除をしている。 | |
| | | まず掃除を労働としてではなく恩返しとして行っていることを伝えます。そして「いつも勉強している教室や学んでいる環境(学校)への感謝の気持ち」という意味がきちんとあって、子供たちが清掃活動をしているという風に説明します。 | |
| 2 | もし、SNSで外国の方と会話をする際は、自分の伝えたいことをしっかり文に出来ているかを確認しなければならぬ。なぜなら、SNSでは顔が見れずに会話をする事が出来る。それは、自分の言いたいことを顔やジェスチャーなどでは表現出来ない。また、自分の文をしっかり打てたととしても、相手にとっては失礼な文になるかもしれない。 | 自らが使う場所を、自らが掃除することで、将来ものを大切にするということを学んでいるという風に、プラスの意味を伝えられるようにする。 | |
| | 他国の人が日本語がわからないからといって日本語で他国のことを傷つけることは投稿しない。 | 人種差別・外国人へのサポート(外国人は税金が安く なったり、日本の大学へ進学する場合学費を国が負担する等) | |
| 2 | もし、SNSで外国の方と会話をする際は、自分の伝えたいことをしっかり文に出来ているかを確認しなければならぬ。なぜなら、SNSでは顔が見れずに会話をする事が出来る。それは、自分の言いたいことを顔やジェスチャーなどでは表現出来ない。また、自分の文をしっかり打てたととしても、相手にとっては失礼な文になるかもしれない。 | 人種差別的考え・人見知りな性格 | |
| | 他国の人が日本語がわからないからといって日本語で他国のことを傷つけることは投稿しない。 | 企業による外国人労働力の利用と人権侵害問題・ジェンダー観に関する問題 | |
| 2 | もし、SNSで外国の方と会話をする際は、自分の伝えたいことをしっかり文に出来ているかを確認しなければならぬ。なぜなら、SNSでは顔が見れずに会話をする事が出来る。それは、自分の言いたいことを顔やジェスチャーなどでは表現出来ない。また、自分の文をしっかり打てたととしても、相手にとっては失礼な文になるかもしれない。 | 他の民族の偏見・日本人の固定概念 | |
| | 他国の人が日本語がわからないからといって日本語で他国のことを傷つけることは投稿しない。 | 言語の壁・同調圧力が強いところ(空気を読め、察しろ、忖度しろなどの見えない圧力が強いところ) | |
| 2 | もし、SNSで外国の方と会話をする際は、自分の伝えたいことをしっかり文に出来ているかを確認しなければならぬ。なぜなら、SNSでは顔が見れずに会話をする事が出来る。それは、自分の言いたいことを顔やジェスチャーなどでは表現出来ない。また、自分の文をしっかり打てたととしても、相手にとっては失礼な文になるかもしれない。 | 日本人各々でアイデンティティを確立することと、日本国内での民族構成の問題を解決すること | |
| | 他国の人が日本語がわからないからといって日本語で他国のことを傷つけることは投稿しない。 | 他の文化を尊敬し理解する事・コミュニケーションが欠けている | |

4. 考察とまとめ

4.1. 学習者の情操につながる「気づき」

受講生の回答から、直接的な異文化体験ではなくとも、大学生の「異文化に対する情操」を育てることを目的とした異文化理解教育は可能であると見受けられる。例えば、授業でテキストや資料などを通して他の文化について理解する際にはカルチャー・ショックに似た感覚を持ち、問いに答えようとすることによって、これまで当たり前だと思っていた日本文化についても多角的に見つめ直し、リエントリー・ショックに似た感覚を持つことが可能と考えられる。そのためには幼児期からそれまでの体験や経験によって培われた感性と基礎的な情操が必要とされることは言うまでもないが、大学において異文化に対する情操を育てるとは、言い換えると、学習者の中で情操に繋がる新しい視点や気づき、つまり「マインドフルネス」がもたらされていることを示唆している。

マインドフルネスの概念は、近年異文化コミュニケーション研究など幅広い分野においても重要視され、ランガー（1990）によると、マインドフルネスを体得するためには3つの考え方；(1) 新たな分類への創造、(2) 新しい情報への着目、(3) 物事には複数の考え方があること、を理解することが大前提となる。「新たな分類への創造」は、既存の枠や先入観を超えて、新たな枠組みを創り出す概念を示す。「新しい情報への着目」は、新たな情報に目を向けて、新たな視点をもつことを意味する。「物事には複数の考え方があること」という考え方は、複眼的視点をもった寛容的な態度の重要性を示している（小坂，2017，p.36）。したがって、文化（他文化・自文化）に対して正誤で評価できるような知識を問うことではなく、あくまでも理解や表現に関わる情操に焦点を当てたアプローチが異文化理解教育には必要である。さらに、異文化理解に関わる情操は、学習者が実際に異文化と出会う前に養われておくことが望ましいと考えられる。

4.2. 今後の可能性と課題

情操教育としての異文化理解教育の実践と通して、今後の異文化理解教育において次の3つの可能性；(1) 異文化理解教育が、異文化を通じて情操を養う教育機会となる可能性、(2) 情操教育における主な4つの側面を異文化理解教育における観点として導入できる可能性、(3) 実際の異文化体験の事前段階に養うべき価値観として情操教育を異文化理解教育に取り入れられる可能性、を示唆した。また、限定的ではあるが、情操教育としての異文化理解教育を外国語学習や第二言語習得における「情意」に関する研究や学習方略に関する研究と関連づけられる可能性もある。

しかしながら、一方で、異文化理解教育の情操教育的アプローチは、その評価方法についていくつかの課題が残った。実際に「異文化を知る」における評価は、上記の質問に対する回答のみならず、出席状況やレポート提出などによって総合的に評価された。したがって、情操教育の観点のみで客観的に評価することには限界も感じられた。例えば、「多様な価値観を受け入れる視点や態度を育成できたと思えず評価基準とはどのようなものになるか」、「授業として行われたため評価を意識して、本当に受講生たちが自分の心の中にあることを述べているかどうか」、「実際に心の中にあることを、言葉を通してどこまで正確に表現できていたか」、といった問題である。特に、留学生にとっては、日本文化が彼ら／彼女らにとっては外国文化ということになり、母国の文化との比較にもなると、より複数の文化比較として複雑な側面をもつことになる。その複雑な価値観を外国語である日本語で表現する難しさがあったと思われる。当然のことながら、情操教育が「価値観」と強く繋がっているため、教員の価値観との相違が評価に影響してはいけないため、評価については慎重になる必要がある。学習者に多角的な視点を求めることと、その評価の観点の絞り方に矛盾が生じ得る。今後、より実践的な枠組みの構築や多角的視野の評価の仕方について検討が必要である。

引用・参考文献

- 小坂貴志 (2017). 改訂版 異文化コミュニケーションの A to Z 基礎理論と豊富な実例から多文化共生を学ぶ. 研究社.
- 佐藤群衛 (2007). 国際理解の現状と課題－教育の実践の新たな視点を求めて－ 教育学研究, 74, 2, 77-87.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/kyoiku/74/2/74_KJ00004650606/_pdf/-char/ja
- 佐藤俊夫・古島 稔 (1966). 道徳教育：情操 東洋館出版社
- 佐野正之・鈴木龍一・水落一朗 (1999). 異文化理解のストラテジー—50 の文化的トピックを視点にして 大修館書店.
- JICA (2011). グローバル化時代の国際教育のあり方国際比較調査 第一分冊
https://www.jica.go.jp/hiroba/teacher/report/comparative_survey01.html
https://www.jica.go.jp/hiroba/teacher/report/prmiv10000002siq-att/comparative_survey01_09.ppd
- 新村 出 (2008). 広辞苑 第六版 岩波書店.
- 瀬田幸人 (2007). 異文化理解教育で扱うべき文化要素について 岡山大学教育学部研究収録, 134, 129-139. https://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/files/public/1/11005/20160527185919419586/134_0129_0139.pdf
- 竹内 愛 (2012). 「異文化理解能力」の定義に関する基礎研究 共愛学園前橋国際大学論集, 12, 105-112.
<https://gair.media.gunma-u.ac.jp/dspace/bitstream/10087/7197/1/2012-takeuchi.pdf>
- 田中豊裕 (2019). 異文化理解とオーストラリアの多文化主義 大学教育出版.
- 林美樹雄 (編) (1978). 情操保育：その理論と方法 川島書店.
- 森上史朗・柏女霊峰 (編) (2015). 保育用語辞典 第 8 版 ミネルヴァ書房.
- 文部科学省 (2005 a). 初等中等教育における国際教育推進検討会報告－国際社会を生きる人材を育成するために－
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/026/houkoku/attach/1400589.htm
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/026/houkoku/attach/1400595.htm
- 文部科学省 (2005 b). 第 9 回初等中等教育における国際教育推進検討会報告 (案)－国際社会を生きる人材を育成するために－資料 3
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/026/shiryou/05080901/003/001.htm
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/026/shiryou/05080901/003/002.htm
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/026/shiryou/05080901/003/003.htm
- 文部科学省 (2011). 学習指導要領「生きる力」
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/gengo/1306118.htm